

第1学年1組 国語科学習指導案

【日時】令和7年7月23日（水）9:20～10:05 【場所】1年1組教室 【指導者】徳永 祐也

本授業の参観の視点

音読劇をしながら（第一の没頭）、読み方を工夫したり考えたことを友達に伝えたりすることを通して（第二の没頭）、場面の様子や人物の行動、心情を具体的に想像し学びを俯瞰する姿をご覧ください。

1 単元名 お話をいっぱいしよう『くじらぐも』（光村図書 1年下）

2 単元の構想

(1) 単元について

『くじらぐも』は児童にとって親しみやすく、楽しく想像を膨らませながら読むことに適した教材である。会話文が多く、同じ会話文の繰り返しがあることで、場面の様子を比べて状況の違いを想像しやすく描かれている。しかし、最も物語の中で中心的な、雲の上に乗って空を泳ぐ場面では会話はほとんど出てこない。あえてこの場面を詳しく描かないことで、雲の上の子供達がどんな表情で、どんな口調で、どんな会話をしたのかは読み手一人一人に委ねられている。読み手は、様々な場面の様子に着目することで雲の上の子供達を具体的に想像することができる。例えば「天までとどけ、一、二、三」と3回もがんばったのだから、雲に乗ったときには、喜びの声を挙げただろうと想像できる。また、「うみのほうへ」行ったのだから、波の音が聞こえただろうと想像できる。このように場面の様子に着目し、人物の行動や心情について具体的に想像する学習は、今後の児童の読書経験や物語を叙述に基づいて想像して読む学習に生かされるだろう。

(2) 児童について

児童はこれまでの物語の学習を通して、登場人物や事柄の順序について学んできた。「おおきなかぶ」では動作化を通して、誰がどんな順番で出てきたのかを読み取り、どんな動きをしたのかを具体的に想像することができた。4月と比較すると場面の様子や人物の行動や心情について想像して読むことができるようになってきている。しかし、自分の考えとその理由について叙述や体験と結びつけながら話すことについては課題があるため、重点的に指導をしていきたい。また、動作化を通して相手を意識して伝わるように表現したり、読み方を工夫するために話し合ったりする姿も少しずつ見られるようになってきている。今後は友達の考えに対して質問したり感想を述べたりしながら、お互いの意見のよさを認め合ったり、自分の意見を深めたりすることができるようにしていきたい。

(3) 指導について

音読劇をお家の人に見てもらうことを単元のゴールとして設定し、よい音読劇にするための工夫とその理由について話し合うことを中心に指導を進める。

第一次では、音読劇をしながら、内容の大体を理解できるようにする。まず、児童に一旦音読劇を委ねる。配役を決める必要が出てくるため、自然と登場人物や会話の話し手に着目し、誰がどの台詞を言っているのか話し合いが始まるだろう。意見のずれが出た場合は全体で話し合いを設け、会話文の前後の表現に着目して場面の様子を具体的に想像できるようにする。

第二次では、音読劇をしながら表現に基づいた読み方の工夫を考えることができるようにする。音読劇の練習をする中で、読み方を工夫している理由を問うことで自分の考えを俯瞰できるようにする。特に、繰り返しの会話文の読み方を変えている児童は全体で取り上げ、その理由を話し合うことで状況の違いを具体的に想像できるようにする。また、雲の上の1年2組の子供達の会話を考える活動を設定することで、雲の高さや速さ、雲から見えるものや人物の気持ちなどについて叙述や挿絵から具体的に想像できるようにし、音読に生かすことができるようにする。

第三次では、音読劇の発表会を行う。その際に、物語の好きな場面を選択できるようにする。場面を選択した理由を考えることで、これまでの学びをもう一度見つめる機会にする。また、音読劇の様子を撮影し友達や家族などの他者に見せる活動も取り入れる。他者と一緒に学習を振り返ることで、学びの達成感と有用感を味わわせたい。

(4) 期待する「回遊する学び」について

本単元及び本時における児童の姿を小学校全体テーマの「回遊する学び」に関わる内容と資質・能力に関連付け、下記のように整理する。

ステージD「実生活・実社会」

お家の人に雲の上に乗った楽しそうな様子を伝えるために、今度はこの部分を元気に読んでみよう。



相手や目的を意識しながら、音読を工夫したり改善したりしている。

【学びに向かう力、人間性等】

→ 毎時間の授業で目的を確認する。

ステージC「他教科」

- ・「天までとどけ、一、二、三」は、三回目が一番大きな声を出したと思うよ。
- ・一回目と二回目で届かなかったから、今度こそって思って言ったんじゃないかな。



時間の経過に気付き、繰り返しの会話文を比べて場面の様子を想像している。

（生活科「みつけたよ」【思考力、判断力、表現力等】）

→ 会話文の声の大きさや言い方は同じかを問う。

ステージB「同教科」

- ・「青い青い」って書いてあるのはとても青いってことだから、2回目を大きく読んだ方がいいね。
- ・「おおきなかぶ」でも、「あまいあまい」のところは、2回目を強く読んだよね。



反復表現の意味を考え、読み方を工夫している。

（国語科「おおきなかぶ」【思考力、判断力、表現力等】）

→ 「おおきなかぶ」での反復表現の学びを掲示する。

ステージA「同単元・同領域」

ばくは「さあ、おようぞ」のところで雲のくじらは一番大きな声を出したと思うよ。
だって、雲の上に子供達に乗って、やる気になっているし、「おようぞ」って強く言っているから、大きな声を出したと思う。



叙述を基に場面の様子や人物の行動、心情などを具体的に想像している。

（国語科「くじらぐも」【思考力・判断力・表現力等】）

→ なぜその台詞を選んだか理由を言っている児童を価値付ける。

単元のゴール：
音読劇をして、
お家の人に聞いて
もらおう！

3 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

よい音読劇にするために読み方の工夫を考えることを通して、場面の様子や人物の行動、心情などを具体的に想像できるようにする。

(2) 評価規準

ア かぎ(「」)の使い方を理解して、誰がどの台詞を読むか正しく分けている。 【知識・技能】

イ 場面の様子に着目して人物の行動や心情を具体的に想像している。 【思考・判断・表現】

ウ 相手や目的に沿って自分の読み方をよりよくしようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】

4 単元の指導計画(全8時間 本時4/8時間目)

次	時	主な学習活動(○)	指導上の留意点(・)	評価規準(◆)【観点】	回遊
一	1	○「くじらぐも」を読み、音読劇の計画を立てる。	・まず音読劇を児童に委ねることで、登場人物や会話の話し手などについて必要感をもって読み取ることができるようにする。	◆物語の内容の大体を捉えている。 【思・判・表】	A D
	2	・まず音読劇をやってみて、音読劇をするために必要な学習について話し合う。	・場面を分けて練習するように伝えることで、時間や場所の変化を意識できるようにする。	◆音読劇をするために必要なことについて友達と話し合い、見通しを立てようとしている。 【主】	
	3	・物語の設定(時間や場所)を確認し、大まかに場面を分ける。 ・登場人物は誰かを話し合う。 ・誰がどんな台詞を言っているかを話し合う。 ・「一、二、三、四」は1年2組の子供達の台詞か雲のくじらの台詞かを話し合う。	・登場人物や会話の話し手などについて、友達との考えのずれを話し合うことで場面の様子や人物の行動などを具体的に想像し、内容の理解が深まるようにする。	◆物語の時間、場所、人物について読み取ることができる。 【思・判・表】 ◆かぎ(「」)の使い方を理解して誰がどの台詞を読むかを話し合っている。 【知・技】	
二	4	○想像をふくらませながら音読劇の練習をする。	・読み方の工夫について理由を問うことで、本文のどこからそう考えたか俯瞰できるようにする。	◆繰り返されている会話を比較し、その周辺の表現から場面や人物の行動をや心情について具体的に想像したことを音読に生かしている。 【思・判・表】	A B C
	5	・「天までとどけ、一、二、三」の繰り返しの会話文の読み方を工夫する。	・読み方の違いを比較することによって認知的葛藤を起こし、場面の様子に着目し人物の行動を具体的に想像できるようにする。	◆自分の考えとその理由について、自分の経験や叙述と結び付けて友達に伝えることができる。 【思・判・表】	
	6	・「青い青い」の反復表現の読み方を工夫する。 ・雲のくじらが一番大きな声を出したのはどの台詞かを話し合い、音読に生かす。 ・雲のくじらの上の1年2組の子供達の様子について、想像したことを話し合い、音読に生かす。 ○自分達の好きな場面を選択し、音読劇の練習をする。	・人物の様子を具体的に想像することで読みの工夫に生かせるようにする。 ・学習したことを振り返ることで、理由をもって自分達の読みたい場面を選択できるようにする。	◆読みたい場面とその理由を友達に伝えている。 【思・判・表】	
三	7	○学級で音読劇の発表会をする。	・読み方の工夫を価値付けたり、始めの音読と比較したりすることで学びの有用性を感じられるようにする。	◆相手や目的を意識しながら音読を工夫したり改善したりしようとしている。 【主】	D
	8	○音読劇の様子を動画に撮影し、家族に見てもらおう。			

5 本時の指導（4／8）

(1) 指導目標

読み方の工夫を考える活動を通して、場面の様子や心情を具体的に想像することができるようにする。

(2) 評価規準

イ 場面の様子や人物の行動、心情を叙述から想像して音読の工夫を考えている。【思考・判断・表現】

(3) 展開（波線部は「回遊する学び」に関わる手立て）

学習活動と児童の反応（「」）	教師の働きかけと形成的評価（◆）
1 音読劇の練習をする。（10分） - 決めた役割の通りに読んでみよう。 - 繰り返されている言葉は声の大きさを変えて読んでみよう。 「天までとどけ。」の会話文は3回繰り返されているね。同じ読み方でいいかな。 - くじらだから、ゆっくり読んだ方がいいのかな。 - 雲のくじらは空にいるから、遠くに呼びかけるような読み方で読んだ方がいいのかな。	1-(1) 声の大きさや速さ、明るさ、間などに気を付けながら読んでいる姿を価値付けることで、叙述に着目しながら音読することのよさを感じることができるようにするとともに、そのよさを全体に広げていく。 1-(2) 反復表現の読み方を工夫している児童に、<u>どんな工夫をしているか、なぜその読み方の工夫をしたのかを問うことで、叙述を基に表現していることを自覚できるようにする。（B）</u>
2 「天までとどけ。一、二、三。」の読み方について話し合う。（10分） 「一、二、三。」の、どこを一番強く読んだらいいのかな。 「手をつないでジャンプ」って書いてあるから、手をつないでジャンプして読んでみようよ。 1回目より2回目の方が高く飛んでるから、大きな声で読んだ方がいいと思うよ。 1回目と2回目では届かなくて、やっと3回目で雲に乗ることができたんだから、3回目が一番大きい声で読むといいんじゃないかな。	2-(1) 地の文の表現から手をつないだりジャンプをしたりして動作を取り入れている工夫を取り上げ、その理由を問うことで、人物の行動を具体的に想像できるようにする。 2-(2) 繰り返しの会話文を工夫して読んでいる児童を見取り、全体で取り上げて読み方の工夫について共有したり、工夫した理由を考えたりすることで、場面の様子や心情について具体的に想像できるようにする。（C）
3 音読劇の練習をする。（5分） 「もっとたくく。」のところも、繰り返したから、同じように工夫できないかな。 1回目より2回目の方が、応援する気持ちが強いと思うよ。	2-(3) 体験や本文を基に自分の考えを話している児童を価値付けることで、叙述を基に想像することを意識できるようにする。 3 他にも同じような工夫ができるところがないか問うことで、雲のくじらの繰り返しの台詞に着目して読み方を工夫できるようにする。
4 雲のくじらが一番大きな声を出したのはどの台詞かについて話し合う。（15分） - 友達と意見が違うな。友達がその台詞を選んだ理由を聞きたいな。 「もっとたくく。」は、繰り返し出てくる台詞だし、1年2組のみんなを応援する気持ちが強いと思うよ。 「さあ、およぐぞ。」は、みんなを乗せて、今から泳ぐぞっていう気持ちだから、大きい声だったんじゃないかな。 「さようなら。」は、一番最後の台詞だし、みんなと楽しい時間を過ごした後だから、気持ちがこもっていて大きな声だったと思うよ。	4-(1) その台詞を言った場面の状況を簡単に確認することで、理由や根拠をもって台詞を選ぶことができるようにする。 4-(2) <u>自由に動き回って友達と意見交換をする時間を設けることで、一人一人が自分の意見を友達に伝えられるようにする。（A）</u>
5 音読劇の練習をする。（5分） - 今日お勉強したことを生かして、声の大きさを変えて読んでみよう。 - 会話文の他にも工夫できるところがないか探してみよう。	◆ 雲のくじらの台詞の読み方の工夫を、場面の様子に着目して具体的に想像しながら考えているか。（発言、観察）【思・判・表】 B 雲のくじらが一番大きな声を出した台詞を、場面の様子に着目して具体的に考え、友達に伝えている。 C→ 同じ台詞を選んだ児童の理由を聞く時間を設け、友達の意見を参考にしながら理由を考えられるようにする。 5-(1) 本時で考えたことを音読劇に生かそうとしている姿を価値付けることで、学びの有用感と音読劇に対する意欲を高める。 5-(2) 学んだことを振り返る時間を設けることで、学びを俯瞰できるようにする。

